

めざすのは「きれいな字」ではなく「生きた字」 手彫りでしか出せない表現で墓石に付加価値をつける

浅草で100年の歴史を有する有限会社白田石材店。「お墓を建ててからが本当のお付き合い」をモットーに、石材工事から石造物まで幅広く対応する老舗石材店だ。中でも石彫り文字に関しては、一般的になりつつある機械吹き付け彫刻ではなくノミ刃での手彫りにこだわり、一字一字に魂を込める。

「手彫りの字は、墓石に高い付加価値を与えうる」として、技術をもつ人にその可能性を知ってもらうこと、エンドユーザーに手彫りの味わいを知ってもらうことにも力を注ぐ同社社長・白田信重氏にお話を伺った。



白田信重氏

墓石との距離が近いからこそ、 石と字にこだわる

都市型の墓地の多くは、1平米ほどの狭小なスペースだ。必然的に墓石も小さくなり、お参りにきた人は間近で墓石を見ることになる。白田石材店ができるだけ国産材を勧め、手彫りにこだわるのはそのためだ。プラストによる吹きつけ彫りは大量生産が可能だが、仕上がり面のバリエーションは1種類しかなく、文字に多様性を出すのは難しい。一方手彫りは、多様な仕上げ方法を持つだけでなく、例えば「薬研彫り」という1種類の彫り方であっても、ノミを入れる角度や深さを変えるだけで字のイメージを大きく変えることができる。

「同じ字体でも、ノミの入れ方ひとつで与える印象はまったく違います。距離が近いからこそ、見たときに思いを感じられるようなお墓にしたいと思っています」

白田氏は、古い墓石などを見るたび、「どんな彫り方がされているのか」「その彫り方に職人や依頼主のどんな思いが込められているのか」を考え、職人にフィードバックして仕事に生かすようにしてきた。過去に建てられた墓石や建造物には、現代にな

い彫り方の工夫が残されており、「言霊」に近いものを感じる字も多いと白田氏は話す。

例えば、泉岳寺にある赤穂浪士の墓に刻まれた「刃」の字。通常の薬研彫りの中央にさらに一段鋭く深くノミが入って複雑な陰影を作り出しているという。

「これを彫った人は、赤穂浪士の最期に何を感じ、どんな気持ちを込めてこれを彫ったのか。感じ方は見る人によってさまざまでしょうが、そこには職人だけでなく依頼主の思い、故人の思いが滲んでいるように思います。昔の墓石に彫られた文字を再現するときは、まず彫り方を見て、彫った人の気持ちを考えますね。新たに彫るときも同じように、お客様と文字一つひとつについて丁寧に話し合い、さらに私と職人が細かな工程を丁寧に打ち合わせた上で彫り進めていくようにしています」



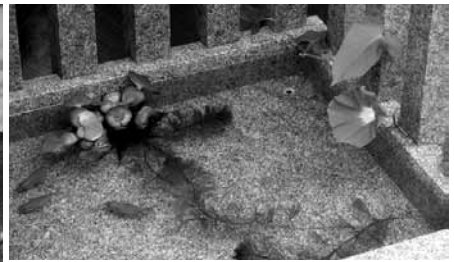
手彫りは熟練職人による細やかな作業だ



古い墓石から文字を移す際は、字に込められた思いまで汲み取るよう努める



手彫りは「生きた字」を生み出す



手彫りのみならず、石の多様な可能性も追及している



手彫りならではの深い味わいがある



表面が傷んだ墓石の追加彫りにも手彫りは有効だ



経年劣化した墓石にも、繊細な微調整が効く

「手彫り」の存在を知れば、 魅力を感じてくれる人は多い

お客様に「どんな字体にするか、字にどんな思いをこめたいか」と聞くと、墓石を国産にするか、和型にするか洋型にするか、といったことと同じくらい熱心に考えてくれるそうだ。墓づくりにおいて最も活発なコミュニケーションが交わされる場所だと言ってもいい。

「機械吹き付け彫刻ではなく、職人の手で彫り進めていくことを知ったお客様は、例外なく喜んでくださいます」

こうした過程で白田氏を感じるのには、「手彫りという技術」の存在が知られていないということだ。



都会の街角に石と水の小さな世界を置くような提案もしたいと考え

手彫りという選択肢を知って初めてその豊かなバリエーションに触れたという人は少なくない。技術がもっと一般にも知られていけば、可能性はさらに広がるのではないかと白田氏は推測する。

潜在的なニーズの一つとして考えているのが、「家族のための墓」ではなく「自分のための墓」を建てる人の存在だ。

「90年代以降、家族観が変わったと個人的には思っています。ペットも家族の一員である、という考え方が広まったのも、ちょうどその頃でしょう。最近では、婚姻関係も血縁関係もない同性のパートナーと一緒に入れるお墓を作ろうという動きも広まりつつあります。家族とは何か、という根本が揺らぎ、より柔軟で多様な括りになっているのではないのでしょうか。誰かに見てもらう墓ではなく、自分たちの願いや思いを墓に残したいという人は、手彫りの文字に魅力を感じてくれるのではないかと思います」

手彫りの潜在的なニーズ、石材店が 技術の有用性に気付いていない

白田氏は、「エンドユーザーだけでなく、石材店側も手彫りの有用性に気付いていないし、技術が

あっても活用していなかったり、継承していなかったりする」と指摘する。

ある石材産地の字彫り業者に出向いて話をした際は、「手彫りの文字彫刻の技術を後進に伝えていない」と聞いて驚いたようだ。

一方で、別の字彫り専門の業者から「手彫りの技術を教えてほしい」という依頼を受けたこともあるという。

「今は機械彫りが全盛で、手彫りは時代遅れの技術だと考えている人が多いのです。確かに、採算や効率だけを考えれば、手彫りは機械彫りに敵いません。しかし、手彫りは繊細で美しく、見る人に訴えかけるような文字を生み出す技術です。機械彫刻と手彫り、それぞれの特性を生かして使い分けることによって、字彫りの表現方法はより豊かになっていくと考えます」

手彫りの技術は継承が難しく、熟練するまでに時間がかかるという固定観念も、技術を埋もれさせる一因になっている。

「石材彫刻に一般的に使われている“ニューマ”を使うことができれば技術的には手彫りはできます。つまり、やろうと思えばすぐに始められる業者はたくさんいるのです」



「ニューマ」。これが使えれば、技術的には手彫りはできるという

問題は、「字をどう見せるか」という感性の部分だ。ただ単に彫るだけでは、字が生きてこない。二次元の字にこめられた意図と全体像をどのように捉え、それをどう三次元に落としこむか。そうした表現のセンスこそが重要で、思慮と習熟を必要とする。

「墓石に付加価値をつける技術として、手彫りを後世に継承していくために、まずはその面白さと、ニーズがあるという事実を知っていただきたいですね。いずれは、生きた字を彫るための表現方法を議論し共有できるチームを作れたらと考えています」

手彫りの文字は耐久性に優れ、時間が経っても視認性が高い。さらに、経年劣化して表面が傷んだ古い墓石への追加彫りの際も、微調整がきく手彫りは有効だという。亡くなる人の母数の増加に伴って既存の墓石への追加彫りも増えていくであろう今こそ、手彫りの技術を見直す時期なのではないだろうか。